

カインの末裔・小さき者へ

有島武郎



カインの末裔・小さき者へ



有島武郎

ほるぶ出版

市古貞次・小田切進 編 日本の文学 37

カインの末裔・小さき者へ

著 者 有島武郎

責任編集 市古貞次 (古典編)

小田切進 (近代編)

発行日 昭和六十年二月一日 初版第一刷発行

発行所 株式会社 ほるぷ出版

代表 中森時人

東京都新宿区新宿二一九一十三

電話 (〇三)三五四一七〇三二(代)

総発売元 株式会社 ほるぷ

東京都新宿区新宿二一九一十三

電話 (〇三)三五六一六二二(代)

製 作 東京連合印刷株式会社

印刷 大日本法令印刷株式会社

目次

カインの末裔

1

小さき者へ

91

生れ出ずる悩み

121

宣言一つ

257

注

出発を記念する代表作三篇

279 271

瀬沼茂樹

カインの末裔*

(一)

長い影を地にひいて、瘦馬やせうまの手綱たづなを取りながら、彼かれは黙りこくって歩いた。大きな汚い風呂敷包ふろしきづみと一緒に、章魚たこのように頭ばかり大きい赤坊あかんぼうをおぶった彼の妻は、少し跛脚ちんぱをひきながら三四間けんも離れてその跡あとからとぼ／＼とついて行った。

北海道の冬は空まで逼せまっていた。蝦夷富士えぞふじと云いわれるマツカリヌプリの麓ふもとに続く胆振いぶりの大草原を、日本海から内浦湾うちうらわんに吹きぬける西風が、打寄うちよせる紆濤うねりのように跡から跡から吹き払っていった。寒い風だ。見上げると八合目まで雪に

なつたマツカリヌプリは少し頭を前にこぶめて風に齒向いながら黙ったまゝ突立って居た。昆布岳の斜面に小さく集った雲の塊を眼がけて日は沈みかゝっていた。草原の上には一本の樹木も生えていなかった。心細い程真直な一筋道を、彼れと彼れの妻だけが、よろ／＼と歩く二本の立木のように動いて行つた。

二人は言葉を忘れた人のようにいつまでも黙って歩いた。馬が溺りをする時だけ彼れは不性無性に立どまった。妻はその暇にようやく追いついて背の荷をゆすり上げながら溜息をついた。馬が溺りをすまずと二人は又黙って歩き出した。

「こゝらおやじ（熊の事）が出るすら」

四里にわたるこの草原の上で、たった一度妻はこれ丈けの事を云った。慣れたものには時刻と云い、所柄と云い熊の襲来を恐れる理由があつた。彼れはいま／＼しそくに草の中に唾を吐き捨てた。

草原の中の道がだん／＼太くなつて国道に続く所まで来た頃には日は暮れてしまつていた。物の輪廓が円味を帯びずに、堅いまゝで黒ずんで行くちんとした寒い晩秋の夜が来た。

着物は薄かった。而して二人は餓え切つていた。妻は氣にして時々赤坊を見た。生きているのか死んでいるのか、兎に角赤坊はいびきも立てないで首を右の肩にがくりと垂れたまゝ黙つていた。

国道の上にはさすがに人影が一人二人動いていた。大抵は市街地に出て一杯飲んでいたのらしく、行違ひにしたゝか酒の香を送つてよこすものもあつた。彼れは酒の香をかぐと急にえぐられるような渴きと食欲とを覚えて、すれ違つた男を見送つたりしたが、いま／＼しさに吐き捨てようとする唾はもう出て来なかつた。糊のように粘つたものが脣の合せ目をとじ附けていた。

内地ならば庚申塚か石地藏でもある筈の所に、真黒になつた一丈もありそう

な標示杭が斜めになって立っていた。そこまで来ると干魚をやく香がかすかに彼れの鼻をうったと思った。彼れははじめて立停った。瘦馬も歩いた姿勢をそのまゝにのそりと動かなくなった。齧と尻尾だけが風に從ってなびいた。

「何んて云うだ農場は」

背丈けの図抜けて高い彼れは妻を見おろすようにしてこうつぶやいた。

「松川農場たら云うだが」

「たら云うだ？ 白痴」

彼れは妻と言葉を交わしたのが癪にさわった。而して馬の鼻をぐんと手綱でしごいて又歩き出した。暗らくなった谷を距てゝ少し此方よりも高い位の平地に、忘れたように間をおいてももされた市街地のかすかな灯影は、人氣のない所よりも却て自然を淋しく見せた。彼れはその灯を見るともう一種のおびえを覚えた。人の氣配をかぎつけると彼れは何んとか身づくろいをしないではいら

れなかった。自然さがその瞬間に失われた。夫れを意識する事が彼れをいやが上にも仏頂面にした。「敵が眼の前に来たぞ。馬鹿な面をしていやがって、尻子玉でもひっこぬかれるな」とでも云いそうな顔を妻の方に向けて置いて、歩きながら帯をしめ直した。良人の顔附きには氣も着かない程眼を落した妻は口をだらりと開けたまゝ一切無頓着でたゞ馬の跡について歩いた。

K市街地の町端れには空屋が四軒までならんで居た。小さな窓は髑髏の夫れのような真暗な眼を往来に向けて開いていた。五軒目には人が住んでいたがうごめく人影の間に居炉裡の根粗朶がちよろ／＼と燃えるのが見えるだけだった。六軒目には蹄鉄屋があった。怪しげな煙筒からは風にこきおろされた煙の中にまじって火花が飛び散っていた。店は熔炉の火口を開いたように明るくて、馬鹿馬鹿しくだゞっ広い北海道の七間道路が向側までとはっきりと照らされていた。片側町ではあるけれども、兎に角家並があるだけに、強て方向を変えさせられ

た風の脚が意趣に砂を捲き上げた。砂は蹄鉄屋の前の火の光に照りかえされて朦々と渦巻く姿を見せた。仕事場の轡の囲りには三人の男が働いていた。鉄砧にあたる鉄槌の音が高く響くと疲れ果てた彼れの馬さえが耳を立てなおした。彼れはこの店先きに自分の馬を引張って来る時の事を思った。妻は吸い取られるように暖かそうな火の色に見惚れていた。二人は妙にわく／＼した心持ちになった。

蹄鉄屋の先きは急に闇が濃かくなって大抵の家はもう戸じまりをしていた。荒物屋を兼ねた居酒屋らしい一軒から食物の香と男女のふざけ返った濁声もれる外には、真直な家並は廃村のように寒さの前にちゞこまって、電信柱だけが、けうとい唸りを立てゝいた。彼れと馬と妻とは前の通りに押黙って歩いた。歩いては時折り思い出したように立停った。立停っては又無意味らしく歩き出した。

四五町歩いたと思うと彼等かれらはもう町はずれに来てしまつて居た。道がへし折られたように曲つて、その先きは、真闇まぐらな窪地くぼちに、急な勾配こうばいを取つて下つてゐた。彼等はその突角とつかくまで行つて又立停つた。遙はるか下の方からは、うぎ／＼する程しげ繁り合つた濶葉樹林かつようじゅりんに風の這入はいる音の外ほかに、シリベシ川のかすかな水の音だけが聞こえていた。

「聞いて見ずに」

妻は寒さに身をふるわしながらこううめいた。

「汝われ聞いて見みべし」

いきなりそこにしゃごんでしまつた彼れの声は地の中からでも出て来たようだった。妻は荷をゆりあげて鼻をすゝり／＼取つて返した。一軒の家の戸を敲たたいて、ようやく松川農場のありかを教えてもらつた時は、彼れの姿を見分けかねる程遠くに来ていた。大きな声を出す事が何なんとなく恐ろしかった。恐ろし

いばかりではない、声を出す力さえなかった。而して跛脚をひき／＼又返って来た。

彼等は眠くなる程疲れ果てながら又三町程歩かねばならなかった。そこに下見囲、板葺の真四角な二階建が外の家並を圧して立っていた。

妻が黙ったまゝ立留ったので、彼れは夫れが松川農場の事務所である事を知った。ほんとうを云うと彼れは始めからこの建物がそれにちがいないと思っていたが、這入るのがいやなばかりに知らんふりをして通りぬけてしまったのだ。もう進退窮った。彼れは道の向側の立樹の幹に馬を繋いで、燕麦と雑草とを切りこんだ亜麻袋を鞍輪からほどいて馬の口にあてがった。ぼり／＼と云う歯ぎれのいゝ音がすぐ聞こえ出した。彼れと妻とは又道を横切って、事務所の入口の所まで来た。そこで二人は不安らしく顔を見合わせた。妻がぎごちなそうに手を挙げて髪をいじっている間に彼れは思い切って半分ガラスになっている

引戸を開けた。滑車かっしやがけたゝましい音をたてゝ鉄の溝を滑すべった。がたびしする戸ばかりをあつかい慣れている彼れの手の力があまったのだ。妻がぎよっとするはずみに背の赤坊も眼を覚さして泣き出した。帳場に居た二人の男は飛び上らんばかりに驚いてこちらを見た。そこには彼れと妻とが泣く赤坊の始末もせず、にのそりと突立つたっていた。

「何なんだ手前てめえ達は、戸を開けっぱなしにしくさって風が吹き込むでねえか。這入はいるのなら早く這入こって来う」

紺こんのあつしをセルの前垂れで合せて、櫓かしの角火鉢かくひばちの横座よこざに坐すわった男が眉まゆをしがめながらこう怒鳴どなった。人間の顔——殊ことにどこか自分より上手うわてな人間の顔を見ると彼れの心はすぐ不貞腐ふてくされるのだった。刃やいばに齒向う獣のように捨鉢すてばちになつて彼れはのさ／＼と図抜けて大きな五体を土間に運んで行った。妻はおず／＼と戸を閉めて戸外に立っていた、赤坊の泣くのも忘れ果てるほどに氣を転倒さ

せて。

声をかけたのは三十前後の、眼の鋭い、口髭くちひげの不似合な、長顔の男だった。農民の間で長顔の男を見るのは、豚の中で馬の顔を見るようなものだった。彼れの心は緊張しながらもその男の顔を珍めづらしげに見入らない訳には行かなかった。彼れは辞儀じぎ一つしなかった。

赤坊が縊くびり殺されそうに戸の外で泣き立てた。彼れは夫それにも氣を取られていた。

上框あがりかまちに腰をかけていたもう一人の男はやゝ暫しばらく彼れの顔を見つめていたが、浪花節語りのような妙に張りのある声で突然口を切った。

「お主ぬしは川森さんの縁ゆかりのものじゃないんかの。どうやら顔が似とるじゃが」
今度は彼れの返事も待たずに長顔の男の方を向いて、

「帳場さんにも川森から話はないた筈はずじゃがの。主ぬしがの血筋を岩田が跡に入れて貰もら

いたい云うてな」

又彼れの方を向いて、

「そうじゃろがの」

それに違いなかった。然し彼れはその男を見ると虫唾が走った。夫れも百姓に珍らしい長い顔の男で、禿げ上った額から左の半面にかけて火傷の跡がてら／＼と光り、下瞼が赤くべっかんこをしていた。而して脣が紙のように薄かった。

帳場と呼ばれた男はその事なら飲み込めたと云う風に、時々上眼で睨み／＼、色々な事を彼れに聞き糺した。而して帳場机の中から、美濃紙に細々と活字を刷った書類を出して、夫れに広岡仁右衛門と云う彼れの名と生れ故郷とを記入して、よく読んでから判を押せと云って二通つき出した。仁右衛門（是れから彼れと云う代りに仁右衛門と呼ぼう）は固より明盲だったが、農場でも漁場で